

磐田市・茶の間ひととき読書運動の歴史

【2025（令和7）年現在】

茶どころ静岡県にて、茶の間（ご飯をたべたり、お茶を飲んだりしてくつろぐへや）で、夕食後のひとときに、おかあさん（おうちの人）と子どもがおたがい話すことで、親子のふれあいをはかることがねらい

1961（昭和36）年

静岡県立中央図書館が、【茶の間ひととき読書】と名づけてはじまる。

小学1、2年生には、まだおかあさん（おうちの人）が本を読んであげることが多いが、3年生ともなると、集団生活に慣れてきて、さまざまなものに興味を持ち、自ら行動できて、いろいろな本を読めるようになる。おかあさん（おうちの人）といっしょに読書をしていく意識がはっきり持てる時期だと考え、小学3年生とそのおかあさん（おうちの人）におけた取り組みとなった。

1966（昭和41）年6月

大藤小、向笠小ではじまる

1967（昭和42）年

岩田小、田原小が参加

1968（昭和43）年

磐田南小、長野小が参加

1969（昭和44）年

磐田東部小が参加

1970（昭和45）年

磐田北小が参加

1971（昭和46）年

磐田中部小、磐田西小が参加

旧磐田市の全小学校（当時10校）で

行う

1980（昭和55）年4月

富士見小が開校、旧磐田市の全小学校

（当時11校）で行う

2005（平成17）年4月

旧磐田市・旧豊田町・旧竜洋町・

旧福田町・旧豊岡村が一つの市となり、

市内全小学校（当時23校）で行う

2015（平成27）年3月

豊岡東小が閉校、

現在は市内全小学校22校で行われている

※資料の用意の
関係で、児童数の
少ない2校の3
年生で試しに行
われた

そもそも「茶の間ひととき読書運動」が はじまったきっかけは？

1960（昭和 35）年 5 月 5 日（子どもの日）

【母と子の二十分間読書運動】が鹿児島県ではじまる

当時、鹿児島県立図書館長をしていた児童文学者・**椋鳩十**がよびかけ

「子どもが、小さい声で、教科書以外の本を二十分くらい

読むのを、おかあさんが、静かに聞く」

二十分間だけ、誰のおかあさんでもない、

自分だけのおかあさんを独占する運動でもある

※**椋鳩十**（本名・久保田彦穂） 1905（明治 38）年～1987（昭和 62）年

きびしい自然と、力強い動物をえがくなかで、動物との心の交流や、命の尊さなどを淡々と表現した。手に汗にぎる迫力ある描写は、自然豊かな長野県や鹿児島県で暮らした経験にもとづく。代表作に『片耳の大シカ』『マヤの一生』、教科書にもとりあげられた『大造じいさんとガン』など多数の作品がある。

＜参考文献＞

『母と子の対話のための読書〈茶の間ひととき読書〉運動の記録』

清水達也 童心社 1969（昭和 44）年

『親子で楽しむ茶の間の読書 資料』永島康子 1985（昭和 60）年

「磐南文化 創刊号」「磐南文化」編集部 磐南文化協会 1977（昭和 52）年

『椋鳩十の本 第25巻 読書論 心に炎を』椋鳩十 理論社 1983（昭和 58）年

『伝記を読もう 16 椋鳩十』久保田里花 あかね書房 2019（令和元）年

『ポプラディア情報館 日本の文学』ポプラ社 2008（平成 20）年